
涙目バレンタイン・デイズ

皿尾 りお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙目バレンタイン・デイズ

【Zコード】

Z5159D

【作者名】

皿尾 りお

【あらすじ】

女子のみなさん！チャンス到来の時期がやって参りました！あの
人を涙目にさせるチャンスです！

「はーー・チョコレートー。」

今日は、バレンタイン・デイ。

僕は、彼女からのリボン付きの可愛い包装紙を、幸せにつぱいに開けた。

・・・・・

えつ・・・・・?

・・・・・

ええ〜〜・・・・・?

・・・ま、まあ、確かにチョコレートなんだけど・・・

で、でも、なんか、良く近所のスーパーとかで売っているような、おかあさんから貰つよつたチョコレート・・・いや、ただのチョコレートですけど・・・

「・・・・・どうかした?」

と、彼女は嬉しそうに僕を見る。

「えー?・・・あつ、なんか、嬉しいで・・・」

僕の手には、安っぽい銀色の包み紙に包まれた小さなチョコがいくつも詰まつた安っぽいビニール製の箱が握られていた。

「食べて、食べて！」

彼女が嬉しそうに叫びながら、僕は、

「…………ん、ああ……」

と言いつつ、銀色の包み紙を開けて、食べた。

…………普通のチョコだ。…………うん、いたつて普通のチョコだ。

…………あ、ヤバイ…………なんだか、泣きそうになってきた。

なんだか、涙目になつてきた…………もう、泣こうかな…………？

なんだか、涙目せいで、彼女がぼやけて見えるよ。

すると、彼女は、

「おこしい？おこしい？」

と、瞳をラクンラクンとして聞くので、僕は、精一杯、取り繕つて、

「…………ああ、おこしいよー！」

と答えた。すると、彼女はさつままでとまつてかわって、幸せそうに微笑みながら、

ホントに幸せそうに微笑みながら、

「・・・・バーカ！ そんなの、おこしにわけないじゃん・・・・」
つちがホントのバレンタインチョコレート・・・・手作りだから、
あんまりおいしくないかもしだれなけど・・・・

と、手作りの包装紙に包まれた手作りの箱に入った、手作りのチョコレートを恥ずかしそうに僕に手渡した。

僕は一瞬、放心状態だつた。

「もうつーたつちのスーパーで買つてきたチョコレートはダミーチョコレートーそれは、私が食べるのーあなたは、私が作ったチョコレートを食べるのー」

と彼女に言われるがまま、僕は手作りチョコレートを食べた。

「ま、ままずい・・・・」

と言つた途端に、幸せな気持ちがじりじりよつもなく湧き上がつてきて、僕は、彼女に背を向けた。

彼女は、多分、声の感じからして、半分にやけながら、

「おーしゃー？ おーしゃー？」

と聞いてくるので、僕は、

「だかーり、ままずいって！」

と、半分、涙声で答えた。

いつも、こんなのはばかりだった。

いつも、彼女は僕を涙田にさせた。

どうやら、彼女は僕を涙田にさせる天才だった。

だから、僕が彼女を街で見かけたとき・・・

知らない男と腕を組んで楽しそうに歩いているのを見かけたときも・・・

僕ことつては涙田へりこでけよひ良かつた・・・

だって、田で見えるものが多すぎるから。

彼女の微笑みを見るとき、僕の田は涙田へりこでけよひ良から・
・・・

(後書き)

最近、ホント、ヤバイです。恋なのかな〜?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5159d/>

涙目バレンタイン・デイズ

2010年10月12日04時42分発行